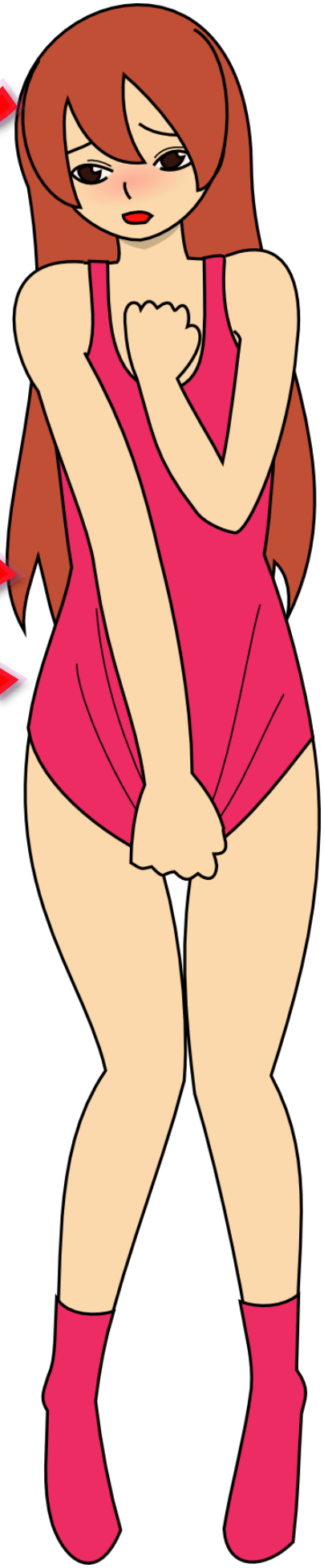
お兄ちゃんの女装を見るとたまらなくなる

女装して誘っているんだよね？



二角レンチ

体験版

R－18

目次

プロローグ.....3
お兄ちゃんの彼女（？）に尻コキ.....6
フェラで口内射精 19
初体験は挿入即中出し.....28
原作利用権について 32
プリンタでの印刷方法.....34
奥付.....35

プロローグ

　僕の足下に跪き、美しい顔を卑猥に歪ませながら僕のペニスを熱心にしゃぶっている。この人が僕のお兄ちゃんだなんて未だに信じられないときがある。
　はじめにお兄ちゃんが女装しているのを見つけたときはとてもショックだった。それなりに尊敬していたかっこいい兄が、女装なんて趣味があることにとても傷ついた。
　問いつめて話を聞くうちに、さらにおどろき傷ついた。そして欲情してしまった。
　お兄ちゃんはただ女装していただけではなかったのだ。男の人と付き合って、女装させられ、奉仕させられていた。男なのに女になっていた。口も、そしてお尻も女として男のペニスを受け入れていたのだ。
　普通なら気持ち悪くて嫌悪する。でも女装したお兄ちゃんはとても美しく、そして強い色気があった。童貞だった僕はお兄ちゃんの恥じらう美しい顔を見ながらいやらしい話を無理矢理聞き出していると興奮した。しおらしく、おどおどして、親にばらされるのを怖がっているお兄ちゃんはつけこまずにはいられなかった。
「はじめはあんなにいやがっていたくせに。今ではこんなに喜んでしゃぶるなんて。淫乱だね。お兄ちゃんは」
　お兄ちゃんは何も答えずさらに大きな音を立ててしゃぶりたてる。美しい顔を大きく振って先から根本まで往復してしゃぶられるともうたまらない。
「恋人に隠れて弟のペニスをしゃぶるなんて。恋人に悪いと思わないの？」
　もう射精しそうだ。でも尻の穴に力を入れてこらえる。
「女装して、男とつきあうなんてお父さんやお母さんに悪いと思わないの？　早く彼女を連れてきて安心させてほしがっているのに。自分が女になって男とセックスしまくっているなんて悪いと思わないの？」
　お兄ちゃんの美しい顔が苦悩に歪む。その表情がたまらない。美しい女を言葉で責めて苦しめる。ぞくぞくする。支配欲が満たされ

る。なんていい女なんだ。
「僕は女の人が好きなのに。男なんて好きじゃないのに。そんな美しい女になって、僕を誘惑して。僕の童貞を奪って悪いと思わないの？　僕の初体験が男で兄だなんてひどいと思わないの？」
　お兄ちゃんが口からペニスを離して反論しようとした。僕はお兄ちゃんの頭を両手で抱えて口にペニスを押し込む。
「言い訳なんかもう聞きあきたよ。ちゃんとわかっているの？　これは罰なんだよ。恋人に、お父さんに、お母さんに、そして僕に悪いことして反省しないお兄ちゃんに罰を与えているんだ。他のだれにも言わないでくれって言うからしかたなく僕が罰を与えているんだよ。わかっているの？」
　僕は腰を突き出してお兄ちゃんの口に根本までペニスを突っ込む。お兄ちゃんが苦しそうにうめく。
「こんな、のどまで使ってペニスを丸飲み出来るまで仕込まれて、悪いお兄ちゃんだ。僕の童貞を返せ。償わせるよ。僕がお兄ちゃんを許せるまで、ずっと、一生でも償わせ続けるからね。罰を与え続けるからね。お兄ちゃんに拒否権なんかないよ。わかっているよね」
　実際には僕がセックスを望んだ。初体験がお兄ちゃんでよかったと思っている。
　僕はあることないこと交えてお兄ちゃんをののしるのが好きだ。やり場のない怒りをぶつけるために、事実とうそを交えてののしりまくる。
　うその方がよっぽどましだった。現実はもっと深く、もっと辛く、もっとうれしく、もっと幸せだった。怒りと憎しみを抱えて苦悶し快楽と幸福におぼれる現実に引きずりこんだ恨みが晴れることは一生無い。
　こんなに美しく、色っぽく、気持ちいい女は他にはいない。他の女とセックスしたことはないけれど、お兄ちゃんがだれよりも気持ちいいという確信がある。
　お兄ちゃんだけでいい。お兄ちゃんが好きだ。僕のものにする。どうせいつか恋人にもふられるだろう。そんなことはありえないのにそう願うときがある。
　お兄ちゃんが恋人と別れたらあとは僕だけだ。完全に僕のモノにする。一生逃がさない。四六時中セックスして僕以外のだれともセッ

クス出来ない身体にしてやる。
　それにお兄ちゃんだって楽しんでいる。いやがっているふりをしているけど本当は僕とのセックスを楽しんでいる。僕にはわかる。お兄ちゃんも僕のことが好きなんだ。恋人と別れられないだけで、本当は僕のことが一番好きなんだ。
　僕は猛烈に腰を振る。まるでセックスするように、お兄ちゃんの口にずんずんペニスを打ち込んでいく。
「あああ。のどに亀頭がごりっと入るこれ、最高。あ、もう、出るよ。飲んで。今日も一滴残らずこぼさず飲んで」
　お兄ちゃんは涙を流している。いやがっているふりがまたそそる。僕の好みをよくわかっている。お兄ちゃんをなぶり泣かせ犯すのが大好きだ。だからお兄ちゃんはいやがっているふりをするし、涙を流して僕を喜ばせる。
「あ、あ、出るよ。出る。ううう、うううううううううう」
　お兄ちゃんの頭を抱え、奥まで押し込む。のどに入り込んだ亀頭から精液を噴き出し直接流し込む。
「ふうう、ううう、うぐぐ、ううう」
　ぶるぶるふるえる。こたえられない快感だ。こんなに気持ちいいフェラチオ出来る女なんてほとんどいないだろう。
「は、あ、はああ、ああ」
　お兄ちゃんはのどを鳴らしてごくごく飲み下す。僕の精液が大好物の淫乱だ。たまらない。
「さ、四つん這いになって。しゃぶっているだけでもう濡れているでしょ。ほぐす前にぶち込まれるの大好きでしょ。入れてあげる」
　僕は女の服を着たお兄ちゃんをベッドに四つん這いにさせる。短いスカートをめくりあげパンツをずり下げ恥ずかしい穴をさらけ出させる。
「あは。やっぱりとろとろに濡れている。いやらしいなあ。お兄ちゃんは」
　僕は射精したばかりでもまったく萎えないほど興奮していた。お兄ちゃんはいやらしすぎて何度でも射精出来てしまう。大きな丸いお尻を突き上げ欲しがっている女の姿。パンツを引き延ばして勃起している股間を見なければ男だと思う人はいないだろう。
　僕はお兄ちゃんの大きな勃起ペニスを女のパンツごと握ってしご

く。お兄ちゃんの甘い吐息を聞きながらひくつく肛門にペニスをめり込ませた。

お兄ちゃんの彼女（？）に尻コキ

　僕はお兄ちゃんの部屋のドアをノックした。
　返事が無い。もう一度ノックする。
「おかしいな。寝ちゃったのかな？」
　ドアの隙間からは明かりが漏れている。夜の十一時。下の階にいる両親は朝早いからとっくに寝ているが、大学生のお兄ちゃんはこの時間まだ起きている。
　おにいちゃんは頭がいい。僕は受験勉強でわからないことがあればこうしてよく訊きにきていた。
　いつもならすぐにドアを開けてくれるのに。もしかしてうたたねでもしているのかな。それならちゃんとベッドで寝ていればいいけど、机で突っ伏していたりしたら風邪をひいてしまう。
　ドアノブをそっと回してみる。鍵はかかっていない。
　お兄ちゃんだって男だ。見られて困ることをしているときはちゃんと鍵をかけている。それに起きているならノックに対し返事をする。だからやっぱりうっかり寝てしまっているのだろう。ちゃんとベッドで寝ているか確認だけしよう。寝ていたら電気も消してあげなくちゃ。
　お兄ちゃんを起こさないようにそっとドアを開ける。いつものことだ。僕たち兄弟はこうして気軽に互いの部屋へ出入りする。もちろん相手がいるときだけだ。困るときはきちんと鍵をかけている。そうでないならノックしたあと返事がなければドアを開けて入っている。
　いつものことだから、このときもそうだった。だからドアをそっと開けて中をのぞきこんだときに心臓が止まるかと思うほど驚いた。
　ベッドの上に、女の人がいる。
　髪の長い女の人が寝ころんでいる。こっちに背を向けて身体を揺すっている。
　短いスカートからお尻が出ている。パンツが少し見えている。そ

れはとても刺激的な光景だった。童貞で、女友達もいない僕にとってスタイルのいい女性のパンチラはすごくいやらしく見えた。
お兄ちゃんの彼女かな。大学で彼女ができたんだ。
僕にも秘密だなんて。今まで彼女ができたなんて聞いたことがない。僕と同じで女の子とろくに話も出来ない奥手だと思っていたのに。僕はお兄ちゃんに初めての彼女ができたことを喜ぶ気持ちと、僕に話してくれなかったことへの憤りで何だかもやもやした。
でもいつ来たのだろう。まるで気付かなかった。親にも僕にも気付かれずに家に連れ込めるのだろうか。一戸建ての二階とは言え窓から女の人を連れ込めるのだろうか。
それにおかしい。お兄ちゃんがいない。ベッドの上には、背を向けた髪の長い女の人だけだ。他にだれもいないようだ。
トイレにでも行っているのだろうか。もしそうなら戻ってくるときの足音でわかる。僕はいけないと思いながらも女の人のパンツから目が離せなかった。お兄ちゃんにばれそうになるぎりぎりまで見ていたかった。
細くくびれた腰はなまめかしかった。お尻が大きいからよけいに細く見える。かなりスタイルがいい。背を向けているからわからないが、おそらく美人だ。巨乳かもしれない。もしそうならうれしいな。女はやっぱりおっぱいが大きい方がいい。
それにしても、ベッドに寝そべって何をしているのだろう。身体が小刻みにふるえている。
何かつぶやいている。肩が上下している。動いている。動かしている。
こんな夜中に彼女を連れ込む。彼女がベッドの上で揺れている。それってつまり、お兄ちゃんがあの女の人とエッチをしているということだろうか。
でもベッドの上には彼女しかいないように見える。彼女の身体に隠れて見えないのだろうか。いや、いくらなんでもそれはない。彼女の向こうにお兄ちゃんがいるなら身体がはみ出して見えるはずだ。
どういうことだろう。わからない。わからないから好奇心がそそられる。それに身体をゆすり何かをつぶやく女の人はとてもいやらしく見える。生身の女の人が何かエッチなことをしているのを見るのは初めてだ。ビデオとまるで違ういやらしい雰囲気がにじみだし

ていた。
　何をしているのか知りたい。確かめたい。やばいのに、僕は考えられなかった。もしばれたら謝ればいい。謝ってすむことではないのに、このときの僕は頭に血が上っていて冷静ではなかった。
　もっと近くで見たい。何をしているのか確かめたい。確かめたらすぐに自分の部屋へ戻ろう。そう考えた。
　ドアを開けたらすぐばれる。近づいたらすぐばれる。なのに僕はそっとドアを開けた。音を立てないように慎重に。
　ばれる。ばれる。でも女の人は気付いていない。夢中になっているようだ。何に夢中なのだろう。雰囲気からしてエッチなことに違いない。
　ドキドキする。開けたドアからすすっと身体を滑り込ませ、部屋へ入った。
　何て大胆なのだろう。どうかしていた。でももう止められなかった。こんなに興奮したのも心臓が痛いほど脈打ったのも初めてだった。
　足音をたてないようにそっと近づいた。一歩一歩踏み出すたびにより強く緊張した。のどを鳴らしてつばを飲み込むわけにはいかない。僕はつばを口にためながら我慢した。
　僕は部屋の照明の影になって気付かれないように腰を落とし、四つん這いで近づいた。
　何だかとても変態的だ。ベッドで背を向けている女に四つん這いで音を立てずに近づく。まるで夜這いじゃないか。そう思うとますます興奮した。
　ごくり。つばを飲み込む。
　血の気が引く。音が大きい。気付かれたか。振り向かれたらどうすればいいんだ。
　さいわい、女の人は気付かなかったようだ。ほっとする。ここまで死ぬほど怖いと思ったのは初めてだ。
　大分近づいたので、様子がわかるようになった。
　女の人はイヤホンで何かを聞いているようだ。それに夢中になっている。だから僕に気付かない。ちょっとの音では聞こえないのだろう。
　ここまで近づけば、何を言っているのかはっきり聞こえる。遠く

からでは何かをつぶやいているようにしか聞こえなかったがつぶやきではなかった。
「あっ、んっ、ふっ、んくうう、んんんん」
あえいでいる。女の人が、甘い蕩ろけるような女の色気に満ちた声でよがっている。
やっぱり、オナニーしているんだ。
女の人がお兄ちゃんの部屋でオナニーしている。
ドキドキする。興奮する。股間が熱くなり、むくむくと膨らんだ。
どうしてお兄ちゃんの部屋で女の人がオナニーしているのだろう。それもお兄ちゃんがいない、一人きりだ。
たぶんこれはプレイの一種なのだ。家族に気付かれないように彼女を部屋へ連れ込む。そしてお兄ちゃんは彼女を残して家を出る。戻ってくるまで一人でオナニーをさせる。それも部屋の鍵をかけないで。
家族に、特にとなりの部屋にいる僕にばれるかもしれない、それを興奮材料にオナニーさせる。そして戻ってきたお兄ちゃんが彼女にその感想を聞く。
ドアをノックされたら鍵をかけて無視すればいい。もしくは服を整えドアを開け、普通にお兄ちゃんはちょっとコンビニに行っているとでも言えばいい。お兄ちゃんの彼女だと言われれば僕はとくに疑問に思わず引き下がるだろう。
でもオナニーに夢中になりすぎて僕のノックに気付かなかったのだ。それどころかこうして部屋に入っても気付かない。
これって見てもいいってことだよね。彼女にこんなことをさせているお兄ちゃんが悪いんだ。僕以上におとなしいくせにこんな変態みたいなことをしているなんて。お兄ちゃんもこの女の人も相当エッチだってことだ。僕に見られてもより興奮するだけでこっぴどくしかられたりはしないだろう。
もちろんそれは自分にとって都合のいい妄想だった。現実的ではない。でも今の状況を説明出来る他の理由は思いつかなかった。なによりこう考えたということにして、彼女のオナニーを間近で見ることへの言い訳ができた。
遠慮することはない。存分に見ればいいのだ。もっと近づこう。
より頭を低くして、ほとんど床にあごをこすりそうにしながらじ

りじりと彼女に近づいた。
　もうすぐそばまで来た。見上げれば彼女の背中がある。いい匂いがする。女の人がオナニーしているエッチな匂いがぷんぷん漂っていた。
「はあ。あ。んん。んああ」
　声を殺しながら、でも漏れてしまうあえぎ。そんなに感じているのか。すごいな。恋人の部屋で一人残されオナニーさせられる。この女相当好き者だぞ。
　もしかして、頼めばやらせてくれるかもしれない。オナニーだけでなく、弟に見つかればやらせてやれと命令されているかもしれない。そんな都合のいいことあるわけがないのだけれども、僕はその期待で股間がはちきれそうだった。
　背中だけ見ればプロポーションは見事だ。これで美人でなかったら詐欺だ。きっととても美しいに違いない。
　僕は這いつくばったまま慎重に移動して彼女のお尻を見る。
　ベッドに寝そべり背を向けている。とても短いスカートだ。こんな短いのはいている女はめったにいない。階段を上れば確実にパンツが見える。女は普通見えそうで見えない長さのスカートをはいて男を翻弄する。
　大きな丸いお尻。こんな間近で見上げるとすごい迫力だ。僕は巨乳が好きだが大きなお尻も好きだ。
　純白のパンツか。こんな大胆なことをするのに清楚ぶりやがって。ど淫乱のくせに。僕はもしばれたときのために、彼女が淫乱だから悪い、自分は悪くないと思いこもうとしていた。
　足をぴったり閉じている。ここからでは見えないがパンツに手を入れていじっているらしい。身体は切なそうにもぞもぞ動いている。
　はあ。はあ。興奮する。どんなエロいビデオよりも興奮している。やっぱり生身の女は映像なんか比べ物にならないくらいエロい。
　匂いがすごい。くらくらする。甘ったるいエッチな匂い。たまらない。女の人ってエッチなことをするとこんないやらしい匂いが出るんだ。
　うっすら汗をかいている肌がなまめかしい。むっちりした太い生足はとても色っぽい。すごくやわらかそうだ。なでまわしたい。そのむっちりふとももに頭を挟まれてクンニしたい。

足開いてくれないかな。股間をいじっているところ見たい。どんなにいやらしい手つきなのだろう。見たくてたまらない。
股間が爆発しそうだ。僕もオナニーしたい。我慢しないと。さすがにばれてしまう。
でもここまできて、果たして気付かれずに部屋を出られるだろうか。たぶん無理だ。きっとばれる。
どうせばれるなら、一緒にオナニーしてもいいんじゃないか。こんなエロいの見たらもうたまらない。童貞には刺激が強すぎる。
僕はゆっくりズボンをパンツごとずらし、勃起ペニスを取り出した。床に片手をついて、もう片方の手でペニスをゆっくりしごく。
この体勢は辛い。あちこち痛くなってくるしやりにくい。でも気持ちいい。
ベッドを見上げ、もぞもぞうごめく大きなお尻を凝視する。スカートから見える純白パンツとお尻をオカズにオナニーする。
すごい。僕今、女の人と一緒にオナニーしている。相手は気付いていないけれど、なんてエッチなことをしているんだ。
射精したい。でもさすがに床にぶちまけるわけにはいかない。しかしこの気持ちよさはどうだろう。今までのオナニーとは桁違いだ。こんなの、イくとき声が出てしまう。
どうせばれるんだ。それにこんなことをしているのだからきっと、僕にばれるのを覚悟の上だ。いや、それを望んでいるはずだ。僕にばれたらきっと手や口で抜いてあげて黙らせろとか命令されているんだ。でないとこんなことはしない。部屋に鍵をかけないなんてありえない。ノックに気付かなかったのではなく、気付いていないふりなんだ。気付いていないふりして誘っているんだ。でないとここまで近づいて気付かないわけがない。
興奮して頭に血が上っていた。だからこんなありえないことを本気で考えた。そしてそれを理由にさらに大胆な行動に出てしまった。
さすがにセックスまでは無理だろうけど、頼めばきっと手か、もしかしたら口で抜いてくれるかもしれない。それぐらいは言われているはずだ。あのおとなしいお兄ちゃんが彼女にそんなことを命令する姿が想像出来ないにもかかわらず僕はそう思いこむことにした。
僕はペニスを握っていた手を離す。その手をゆっくりと上げる。
床にうずくまったまま彼女に近づく。片手を彼女のお尻に近づけ

る。そして口を彼女の耳に寄せる。
　ドキドキする。なんて緊張だ。心臓が口から飛び出そうだ。でももう止められない。
　僕は、彼女のお尻にそっと指先を這わせた。
「ひっ」
　彼女がびくりとふるえる。すごくおどろいたように見える。演技が上手いな。どうせ僕に気付いていたくせに。
「静かに」
　彼女の耳元にささやく。彼女は見ていて哀れなぐらいがくがく大きくふるえて縮こまっている。かなり迫真の演技だ。すごいな。本当におびえているように見える。
　女の人をおびえさせる。それはぞくぞくする体験だった。このときまで自分でも気付いていなかったが、僕はこうして女の人を服従させる支配欲が強いらしい。
「静かにして。声を出さないで。お兄ちゃんの彼女だよね。こんばんわ。いや初めましてかな。そのままじっとしていて」
　彼女はがくがくふるえているけれど動かない。声も出さない。
　僕は彼女のお尻をなでまわす。指先だけを触れて円を描くようにゆっくり這わせる。なんてやわらかさだ。ズボンを下ろしてむき出しのペニスから先走りがしたたり床に垂れて糸を引く。
「やわらかいお尻だね。ねえ、どうしてお兄ちゃんの部屋で、一人でオナニーなんかしているの。教えてよ」
　ふるえて身動き出来ない女の尻を触る。ぞくぞくする。女をいいなりにするってすごく楽しいぞ。
　僕はもぞりと身体を起こす。彼女はばっと身体を翻してうずくまる。ひざと頭をくっつけるようにしてベッドに顔を伏せる。
「顔見せてよ。駄目なの。お兄ちゃんにそう言われているの？」
　お尻を両手でなでまわす。スカートをめくり上げパンツの上から存分に、手のひら全体で感触を楽しむ。
「うわあ。やわらかい。いいお尻だねえ。何も言わないってことはお尻触っていてもいいんだよね。はあ。うれしいなあ。僕女の人のお尻触るの初めてだ」
　はじめに手を振り払ってくれたらそれで終わりだった。あとは勃起ペニスを見せつけて手か口で抜いてくれるようにお願いするつも

りだった。でも触っていても文句を言わないものだから触るのをやめられない
「お尻大きいね。やわらかいなあ。お兄ちゃんはいいなあ。いつもこんなエロいお尻触っているのかあ」
　たぶんこれっきりだ。何も言わないならたっぷり楽しもう。
　こんなのセクハラで、痴漢で、犯罪だ。でも僕は、彼女がお兄ちゃんにこういうプレイを命令されていると決めつけていたから悪いことをしている意識は無かった。むしろしてあげるのが当然だと思った。彼女だって怖がっているふりして興奮している淫乱だろうからかまわないのだ。
「ね、何聞いているの」
　僕はベッドに顔を埋める彼女の耳からイヤホンを取ってつけてみる。思った通り、いやらしい音声が聞こえてきた。
「あ、あん、犯さないで。いや、感じてなんか、ないのに、くう、あ、あああ、そんなに突かれたら、イっちゃう、イっちゃう、あ、あはあああ」
「ははは。ベタだね。こういうのが好きなんだ。もしかして、僕にも犯されたいとか思っている？」
　彼女はベッドに顔をこすりつけるようにして左右に首を振る。
「その仕草、かわいいね」
　僕はベッドに上がり、彼女にのしかかった。勃起ペニスをやわらかいお尻にこすりつけると彼女はびくりと大きくふるえた。
「ね、おっぱい触らせてよ」
　うずくまる彼女の胸を触ろうとするが、彼女は手足を抱えるようにうずくまっているため手が入らない。僕はしかたなく肩やうでをなでまわした。
「はあ。はあ。興奮する。僕童貞なんだ。女の子触るの初めて。君やわらかいね。すごくいい匂いがする。ねえ。何か言ってよ。お兄ちゃんに、どこまで許していいって言われているの」
　彼女は何も言わない。それでもいい。僕はべたべたと彼女のあちこちをなでまわした。
「お兄ちゃんの彼女が、お兄ちゃんの部屋でオナニーしているなんて。鍵かけないで、僕にのぞいてほしかったんだよね。それを考えて興奮していたんだよね。どう。こうやって触られた方が興奮する

でしょ。感じる？」
　強くせかせかともんでも気持ちいいわけがない。でも僕はそんなことは知らず、ビデオみたいに乱暴に触れば女の人は気持ちよくなると思いこんでいた。
「のぞかれて、オナニーしているのばれたときどうするって言われているの？　手で抜いてあげろって言われているの？　それとも口までしてもいいって？　もしかして、セックスまでしてもいいって言われている？　僕の筆下ろしをしてあげろってお兄ちゃんに言われているの？」
　無茶苦茶興奮する。ペニスは先走りを垂らしっぱなしでこすりつける彼女のパンツをぐっちょり濡らしていく。
「ねえセックスさせてよ。駄目？　じゃあ口は？　駄目なの？　手も駄目？　ねえ何か言ってよ。どこまでしてもいいって言われているの？　僕もう我慢出来ないよ。射精したい。抜いてよ。気持ちよくしてよ」
　彼女はうずくまってふるえたままだ。何もしてくれる気配が無い。
「それとも、そうしてじっとしてろって言われたの？　顔見せるなって言われた？　美人だから見せたくないって？　お兄ちゃんはひどいや。彼女いることを隠していて、見つかっても顔を見せてくれなくて。何もするなって言われているんだ。ひどいや。僕のペニス、もう射精しないとおさまらないのに何もしてくれないなんてあんまりだ」
　彼女のお尻にぐいぐいペニスを押しつけておねだりする。でも彼女は何もしてくれそうにない。
「そうやってじっとして、何もするなって言われているんだ。でも触らせてくれるからには触っていいんだよね。背中とお尻だけか。顔もおっぱいもあそこも駄目なんだ。ちぇっ。でもいいよ。お尻やわらかいものね。これで我慢するよ」
　僕は先走りと汗で湿ったパンツを引っ張ると、僕のペニスを差し込んだ。
　彼女がびくりとふるえる。それでも声も出さず顔も上げない。
「セックスまでとは言わないけど、口でしゃぶってくれないかな。駄目？　ならこのまま、尻コキしちゃうよ」
　彼女のお尻の割れ目に竿をあてがい腰を前後させた。パンツとお

尻に挟まれ布と肉のやわらかい感触がとても気持ちがいい。
「あ、これ、すごい。はあ。気持ちいいよ」
　彼女の尻を両手で抱える。やわらかい尻をぐいぐいもみながら尻にペニスをこすりつける。
「ん、ちょっとやりにくい。ね、お尻上げてよ」
　でも彼女は動いてくれない。しかたなく、僕は下から突き上げるようにして腰を振りお尻の割れ目にこすりつける。
　ペニスを包んだパンツが腰を突き出すたびにぐいっと引っ張られる。パンツの中でペニスが暴れ回る様はとても卑猥だった。
「はあ。はあ。エロい。すごいや」
　女の人との初エッチが尻コキなんて。まあいい。これはこれで、想像していたよりはるかに気持ちいい。
「ん、ん、お兄ちゃんに、こんなエッチな彼女がいたなんて。はあ。弟の、僕にまで、こんなことをさせてくれるなんて」
　実際に彼女は何も許可していない。勝手にさせてくれると思っているだけだ。もしこれが僕の思いこみにすぎなかったらとても大変なことをしでかしている。でもそれならもう少しいやがるはずだ。何も言わないのだからしてもいいはずだ。
「はあ。はあ。気持ちよすぎてもう出ちゃうよ。あ。我慢できない。出すよ。このままパンツ汚しちゃうよ。いいよね」
　彼女は相変わらず何も言わない。それを肯定の意味だと勝手な解釈をする。
「出すよ。出すよ。んんん。尻コキで、パンツの中に、出すよ」
　猛然と腰を振る。尻の谷間は熱くて汗や先走りでぬるぬる滑って最高だ。
　どぐ、どぐ、どぷううううう。
　射精した。女の人のパンツの中にどんどん出す。それは尻に垂れてお尻の割れ目をどろどろしたたっていく。
「う、は、すごい、僕、お兄ちゃんの彼女に射精している」
　たくさん出た。この世のものとは思えないほど気持ちよかった。女の人とエッチするのって何て快感なんだ。オナニーとは桁が違う。すごすぎる。気持ちよすぎる。
　彼女のパンツと尻をべっとりぐちょぐちょに汚してしまった。パンツをかぶせたままのペニスはそのいやらしい光景を見て、射精し

たばかりなのに硬く跳ね上がった。
　彼女の背中にのしかかり、服が精液で汚れるのもかまわず抱きしめた。
「セックスしよう。セックスさせて。もう我慢できない。君いやらしすぎる」
　お兄ちゃんの彼女。背中だけだが見た目はとても大人らしく成熟したプロポーションだ。僕より年上に違いないのに僕はまるで年下の女の子に対するような口をきく。
「ここまでしたんだ。もうセックスせずにはいられないよ。お兄ちゃんに頼まれたんでしょ？　弟の筆下ろししてやってくれって。ねえそうでしょ。そうだよね。セックスしたい。させて。筆下ろししてよ。ねえったら」
　力づくで彼女の身体をひっくり返そうとする。彼女は身をよじって暴れる。
「ははは。華奢だね。女が男にかなうものか。かわいいなあ。いやがっているふりしちゃって。燃えるよ。こういうの好きだなあ。お兄ちゃんとするときもいやがってみせるの？　お兄ちゃん、僕よりおとなしいくせにそういう趣味があったんだあ。兄弟だから趣味が似るのかもね」
　実際彼女は僕より力が弱かった。暴れて抵抗しているけれど、とうとう顔をこっちに向けさせた。
　すごい美人だった。
　長い髪はとてもきめ細かくてきれいだった。そしてまつげはもっときめ細かく繊細で美しかった。
　大きな瞳はうるんでいた。ほほは涙で濡れていた。僕が触っている間ずっと泣いていたのだろうか。いやがるふりもここまで泣き真似出来ればたいしたものだ。
　どこかで見たことがある気がする。懐かしさを感じるまなざし。でも知らない人だ。こんな美人、たとえ町中ですれ違っただけだとしても忘れやしない。
　ふっくらした唇はとてもやわらかそうだった。その口が何かを言おうとうごめいている。まるで僕を誘っているように見える。僕は吸い込まれるように唇を重ねた。
「んんん、んんー、んー」

暴れる彼女にのしかかり、両手首をつかんでベッドに押しつける。そして執拗にキスをした。彼女は歯を開いてはくれなかったが、僕はやわらかい唇に舌を差し込み歯をなぞった。
彼女は上半身だけをひねって僕にキスされている。涙をぼろぼろこぼしている。本当にいやがっているみたいだ。たまらない。なんてそそるのだろう。いやがる女を無理矢理犯す。それは男ならだれでも持つ願望だ。
実際に犯す機会なんてない。してはいけない犯罪だ。でも今はいいんだ。彼女が部屋の鍵もかけずにオナニーしていたのは僕を誘っていたからだ。童貞を誘惑したら、セックスしたがるに決まっている。それを我慢させるなんて許されない。
ひざを曲げて両足をぴったりそろえる彼女のひざに手をかける。
「あっ」
彼女がとっさに手をのばす。僕はそれを振り払い、再び彼女の足に手をかける。
ぐいっと力を込めて左右に開かせる。僕の方が力は強い。抵抗したところで彼女は僕に逆らえない。
彼女は両手で顔を覆って恥ずかしがっていた。僕は彼女の足を広げさせ、その股間を期待をこめてのぞき込む。
そして絶句する。ありえないものを目の当たりにして僕はのどを詰まらせる。
短いスカートをはだけ、女のパンツからはみ出ていたモノは。
僕と同じ、勃起したペニスだった。
「う、う、ぐすっ、ひっく」
彼女は顔を手で覆って泣いていた。でもその声は、さっきまでの甘い女の声ではなかった。とても聞き慣れた、毎日聞いている、よく知っている声だった。
僕は混乱する頭で、でも確かめずにはいられなくて、彼女の髪に手をのばす。力を入れてひっぱると、ずるりとその髪が取れた。
長い髪のウィッグを外すと、毎日見ている、男にしては長めのさらさらした髪が現れた。
この髪、この泣き声、よく知っている。女の服を来て、さっきまで女の声を出していた、正真正銘見ても触っても女だったはずなのに、女のパンツから勃起ペニスを生やしたこの人は。

「お、お兄、ちゃん……？」
　お兄ちゃんは、わっと大きな声をあげて泣き出した。

　このあとはお兄ちゃんがどうして女装しているのか、どうしてそんなに女らしくなってしまったのかなどの話をしながら、でもその色香にあてられ少しずつエッチなことをしてしまいます。
　以下ではエッチシーンの一部をごらんいただけます。

フェラで口内射精

翌日の朝、家族で朝食を取る。僕は受験で朝から勉強するし、お兄ちゃんは大学へ行く。両親は仕事に行く。だからみんな朝早く、朝食を一緒に食べる。

両親はいつもどおりだ。昨日のことが聞こえたりばれたりしていないかちょっと心配だったけれど大丈夫だ。両親は仕事で疲れているので夜はぐっすり寝ている。

お兄ちゃんもいつもどおりだった。昨日のことがまるで無かったかのようにいつもどおりすぎる。意識してしまっている僕に比べえらく余裕だ。

昨日は終わりの方はすっかりお兄ちゃんのペースだった。余裕ぶっているのがむかつく。僕はエッチ未経験でお兄ちゃんはたくさん経験している。内心笑われているようで腹が立った。

お兄ちゃんは僕より下なんだ。僕より頭がいいけど僕より気弱でおとなしい。お兄ちゃんが僕より上で余裕ぶってリードするなんて許せない。

昨日、泣いておびえる女を責めるのは楽しかった。ぞくぞくするほど快感だった。きれいな女を支配する。言葉で責めて身体で責めて泣かせる。そうしたいのだ。お兄ちゃんは僕より弱い、すぐに泣いてしまうか弱い女の子じゃないといけないんだ。

今日はもっと強気でいこう。お兄ちゃんを支配するんだ。心も身体も従属させていずれ彼氏と別れさせてやる。

お兄ちゃんは僕の怒りを知りもせず、いつものように両親と楽しく会話している。僕はその会話に合わせながら内心今夜はどうしようかとあれこれ考えていた。

お兄ちゃんは顔がきれいだ。こうして男の格好で男としてふるまっているとちゃんと男に見える。でも女として見ると、たしかにきれいな女の顔にも見える。今までは気付かなかったけれど、たしかに女っぽくなっていた。

恋をしたり、欲情したり、怒ったり。今まで無かった強い感情がごちゃごちゃに絡み合う。お兄ちゃんを支配し泣かせたいというのはお兄ちゃんを独占したいという嫉妬ゆえだった。お兄ちゃんが他

の男を一番好きで、その男に仕込まれた女の魅力で僕を翻弄するのが許せなかった。好きになってしまったお兄ちゃんに、彼氏より劣ると思われているのがみじめなのだ。
　僕はその日ずっと上の空だった。授業も勉強も身が入らない。今夜すっきりしないことにはおさまらない。
　深夜、両親が寝静まった頃、昨日と同じようにお兄ちゃんの部屋を訪れた。
　ノックすると、返事があった。僕だと答えるとドアが空いた。
「入って」
　お兄ちゃんが女の声で招き入れる。その声だけでドキドキする。恋ってすごいな。声だけでこんなに幸せな気分になる。
　もちろん僕がお兄ちゃんに恋をしているなんて言えない。今言ったところで恋人のいるお兄ちゃんにはふられるのがオチだ。僕に惚れさせないと。僕がいないと耐えられないように躾ないといけない。
　お兄ちゃんの部屋へ入りドアの鍵を閉める。また二人きりだ。女のような、いや女のお兄ちゃんと二人きりになる。
　お兄ちゃんはまた長い髪のウィッグをつけて、女装していた。短いスカートから見えるむっちりしたふとももがなまめかしい。僕は見とれてごくりとつばを飲み込んだ。
　お兄ちゃんがほほえみながら手を広げる。僕は吸い寄せられるようにその胸に顔を埋め抱きついた。
　やっぱり男だから胸が無い。なのにどうしてこんなにやわらかくて心地よいのだろう。それはきっと惹かれているからだ。抱きしめられると安心する。
　抱き合っていると、お兄ちゃんのやわらかさで興奮してきた。股間がむくむくと膨らみ始める。
「うふふ。話をしにきたんじゃないの？」
「触りながらでも話は出来るよ」
　今日はその余裕を無くしてやる。昨日みたいに泣き顔が見たい。あのぞくぞくする支配欲を満たしたい。でも同時に、このまま依存し身を委ねたい気持ちもわいてくる。美しいお兄ちゃんにリードされて何もかも教えてもらいたい。
　揺れては駄目だ。気を強くもたないと。お兄ちゃんを支配している彼氏から奪い取るにはそれ以上に強く支配し従属させないといけ

ない。
　僕はお兄ちゃんに抱きついたまま押していく。ベッドに足がぶつかりお兄ちゃんがベッドに座る。そのまま押し倒すようにのしかかり、二人ともベッドに上がる。
「はあ。はあ」
　僕はズボンとパンツを一緒にずらして勃起ペニスを露出させる。お兄ちゃんの手を取ってそれを握らせる。
「ああ。今日もすごく硬い」
「お兄ちゃんのせいだよ。お兄ちゃんが僕を誘惑するからこんなになっちゃったんだ」
「駄目。ちゃんと話をしないと」
　僕はお兄ちゃんの唇を奪う。お兄ちゃんは顔を背ける。その横顔にちゅっちゅとキスをする。
「強く吸っちゃ駄目。痕が残っちゃう」
「親にばれるから？　それとも彼氏にばれるから？」
「どっちもよ」
「彼氏を裏切って、弟と浮気するなんて悪いお兄ちゃんだね。わかっているの？　お兄ちゃんがどれだけ悪いことしているか」
「あなたが勝手にしているんでしょ」
　お兄ちゃんの手がやわやわとペニスをしごく。すごく軽く握りゆっくり動かすだけで全身がふるえて腰が引けるほど強い快感がほとばしる。
「お兄ちゃん、昨日部屋に鍵をかけていなかったのわざとだよね。女装して背を向けてオナニーしていたのわざとだよね。いつものように、返事が無ければ僕はドアを開ける。それがわかっていてあんなことしたんでしょ」
「違うわ。昨日は彼氏としていなかったから、彼氏に抱かれるときのように女装してオナニーしていただけよ」
「うそだ。僕が受験勉強で、夜中でもよくわからないところを聞きに行く。それがわかっていて鍵もかけずに女装オナニーするわけがない」
　お兄ちゃんの身体をまさぐる。どこもかしこも何でこんなにやわらかいんだ。胸なんか平らなはずなのにもみ心地がすごくいい。服の上から手のひらでなでまわすと乳首が尖っているのがわかる。興

奮しているんだ。とりすましているけど興奮している。
「どうして私の部屋へこっそり入ったの」
「昨日言ったでしょ。お兄ちゃんの彼女だと思った。お兄ちゃんが彼女をこっそり連れ込んで、自分は出かけて、一人で部屋の鍵もかけずにオナニーさせている。そういうプレイだと思ったんだ。僕にのぞかれてしまうかもしれないと興奮するプレイ。そしてもし見つかったら口止めに抜いてくれると思ったんだ」
「飛躍しすぎよ。そんなことあるわけないじゃない」
「でも、実際はそれ以上にとんでもないことだったよ。まさかお兄ちゃんに女装趣味があったなんて。男と付き合って女にされていたなんて」
「知られたくなかったのに」
「うそだ。知られたかったんでしょ。だから部屋の鍵をかけなかった。僕にのぞかれ知られたかったんだ」
「だって私女の子だもん。きれいな女の子なのを他の男にも見て欲しい。でも彼氏が許してくれないの。俺以外の誰にも見せるなって強く言われているの。だから家で、自分一人で女装オナニーするくらいが精一杯。彼氏に会えないときだって女の子でいたいのに」
「こんなの、親が知ったら悲しむよ。お父さんもお母さんも理解してくれない。きっと泣かれちゃう。親不孝をしているんだ。お兄ちゃんは」
「いつか、わかってもらえる日が来るわ」
「来ないよ。一生来ない。言ったら駄目だよ。ずっと我慢するんだ」
　お兄ちゃんの顔がくしゃりと歪む。涙が浮かぶ。これこれ。これが見たかった。
「そんなに、女の子になりたいんだ」
「だって。女の子でいるってすごく幸せなの。今まで男だけだった。人の中には男の部分と女の部分があるの。女の部分を押し込めて見ない、気付かない。それがとても不幸なことだとわかったの。自分の半身が鎖につながれているようなものよ。私は女になってようやく自分の全てが満たされたの」
「彼氏にそう言われたの？　本気でそんなことを信じているの？　違うよね。ただの女装好きの淫乱だ。男のくせに男のペニスが欲しい変態だ」

「変なことじゃないわ。世間では偏見がひどいけど、男が男とセックスしたがるのは変ではなくて普通なのよ」
「そんなわけないじゃないか」
「だってあなたも、私とセックスしたがっている。男なのに、男とセックスしたがっている」
　かっとなる。僕はお兄ちゃんの顔に跨ってペニスを唇に押しつけた。
「黙れよ。お兄ちゃんが悪いんだ。そんなきれいな女の人になって、僕を誘惑して。僕は男なんかとセックスしたくないのに。もうお兄ちゃんを見ているとたまらないよ。どうしてくれるんだよ。責任取ってよ」
　ぐいぐいと押しつける。お兄ちゃんは涙をこぼしていやがる。
「女装オナニーじゃ満足出来ないからって僕を誘惑して。童貞なのに、もう男のお兄ちゃんとセックスせずにはいられない。どうしてくれるんだよ。僕絶対お兄ちゃんとセックスするからね。僕の童貞を男で喪失させる責任取らせるからね」
「んん、そんなの、あなたが勝手にしているだけじゃない。しなければいいじゃない」
　お兄ちゃんの美しい顔にペニスを押しつける。こぼれる涙をペニスに塗り付けそれをやわらかいほほに塗り広げる。
「ふざけるなよ。こんなきれいで、やわらかくて、いやらしい女がそばにいたら我慢できるわけないだろ。僕今日勉強に身が入らなかった。受験生なのに。受験に失敗したらどうするんだよ。お兄ちゃんのせいだよ。僕が勉強に集中できるようにすっきりさせるのはお兄ちゃんの義務だよ。それが責任を取るってことだろ。違う？」
「違うわ。やめて。こんな」
「ああ？　うそばっかり。お兄ちゃんはうそが上手いね。恋人が出来たのに隠していた。女装して女になったのに隠していた。全然気付かなかった。そぶりも見せないなんてすごいよ。そしてその涙。いやがり方。うそ泣き上手いね。彼氏に仕込まれたんだ。わかるよ。すごくそそる。もっとひどいこと言って泣かせたくなる。男にひどいことされるとうれしいんだ。この淫乱が」
「違う、違うの」
　ぼろぼろと涙をこぼすお兄ちゃんはとても美しかった。泣き顔が

こんなに魅力的な女が他にいるだろうか。
　泣き顔がすごく素敵だ。魅了される。きっと男をその気にさせるのに効果的なことを自分でわかっているんだ。だから泣くんだ。内心悦んで舌を出しているに違いない。僕を上手く誘導出来てほくそ笑んでいるに違いない。
　馬鹿にしやがって。そっちがその気ならこっちもわざとのってやる。こんな楽しくて興奮することが他にあるか。ののしり泣かせて犯してやる。
「何が違うんだ。僕を誘惑して、オナニー代わりにする気だろ。彼氏に会えないときに女になりたい欲求を満たす為に僕を利用しやがって。ひどい奴だ。兄が女装で弟を誘惑する変態だなんて悲しいよ。こっちが泣きたいくらいだ」
「私、そんなつもり全然無い。今日だって、話だけのつもりで」
「うそつけ。じゃあこれは何だ」
　僕はお兄ちゃんに跨ったまま後ろ手にまさぐる。案の定、そこには勃起したペニスがあった。スカートをはだけ女のパンツを引き延ばしてそそり勃つペニスを僕はぎゅっと握った。
「ああん、そこはあ」
「こんなに大きくして。変態が。ののしられて顔にペニスを押しつけられて興奮したんだ。泣いているふりして悦んでいたんだ。泣いていればもっとののしってくれる。ひどいことをしてくれる。さすが初めてがレイプな奴は違うね。ひどいほど興奮するんだ」
「違うわ。彼との初めては愛し合ったの。レイプじゃないの。絶対違うの」
「認めたくないだけだろ。初めてがレイプだなんて悲惨だもんな。でもそれを認めたくないからってその相手と付き合ってセックスし続けるってどれだけおかしいことかわかっているの」
「おかしくない。彼は今とってもやさしいし、とっても気持ちいいセックスしてくれるの」
「でも、セックスばかりなんだろ。ちゃんとしたデートしているの」
　お兄ちゃんの顔がひきつる。あきらかに動揺している。
「し、してないけど。でもそれは、女の私が好きだからよ。他のだれにも私の女装を見せたくない。だから彼の部屋とかみんなが帰ったあとの部室とかで女装してみせる。他のどこへも行けないんだか

らすることなんてあまりないじゃない。セックスするのは仕方ないわ」
「本当は自分でもわかっているんだろ。でも認めたくないんだろ。自分が恋人でなく都合のいい女だって。ただの肉奴隷にされているって」
「違う違う、いやあああ。どうしてそんなひどいこと言うの」
「声が大きいよ」
　僕はお兄ちゃんのペニスをパンツごとしごいてやる。お兄ちゃんは甘い声を出して仰け反った。
「下でお父さんたち寝ているんだから。静かにしなよ」
　お兄ちゃんの口を手で塞ぐ。そしてペニスをしごき続ける。うめくお兄ちゃんはじっと耐えている。ぞくぞくする。これだよこれ。泣いている女を押さえつけ一方的に責める。なんて激しい悦びなんだ。今までしたどんな遊びよりも楽しいぞ。
「大きな声出さないって約束できる？」
　お兄ちゃんがこくこくとうなずくと、僕は口を塞いでいた手を離した。
「お兄ちゃんは女装して女な自分を男に見て欲しいんだ。男に欲情して欲しいんだ。男にセックスして欲しいんだ。それもののしられ犯され泣かされたいマゾだなんて。変態が。僕を利用して、許さない。もう我慢出来ない。はあ。しゃぶってよ。彼氏に鍛えられた口で僕をイかせてよ」
　お兄ちゃんは涙目で僕をじっと見つめる。その潤んだ瞳には確かに欲情の火が灯っていた。
　どうせ思い通りに上手くいったと思っているのだろう。いいさ。利用されてやる。そのかわりさんざん気持ちよくさせてもらう。そして気持ちよくして僕無しではいられなくしてやる。彼氏とするより僕とばかりしたがる肉奴隷に変えてやる。
　お兄ちゃんのふっくらした唇に亀頭を押しつける。唇が割れてにゅるりと亀頭を飲み込んだ。
「ううう、うっ、ふうう」
　全身に悪寒にも似た快感が走る。亀頭から脳天まで突き抜け全身をふるわせる。
「う、はあ。何だこれ、すごい、ぬるっときて」

あまりの快感におどろいていると、お兄ちゃんが頭を上げて僕の竿まで飲み込んだ。
「うううううううううう」
ひざががくがくする。気持ちよすぎる。何だこれ。口の中は熱くてぬるぬるで、粘膜の感触は肌とはまるで違う。別次元のとんでもない快感が僕を襲う。
「う、は、あ、はあ」
お兄ちゃんの顔に跨る僕をお兄ちゃんは下から責める。頭を上下に振って僕の竿を飲み込んでは引き出す。亀頭は口の中に入りっぱなしだ。カリ首から根本までをぐいぐい唇でしごいていく。口の中では舌が踊り翻弄してくる。
「す、すごい、うあ、すごすぎ、うう、ま、待って、待って」
お兄ちゃんが僕の尻を両手でつかむ。僕を逃がさないようにして、激しくしゃぶりたてる。
「あ、ああ、出ちゃう、出ちゃうから」
楽しむ間も無い。あっと言う間に射精感がこみあげてくる。
お兄ちゃんは頭を激しく振る。こんなのかなりしんどいはずだ。相当仕込まれていなければこんなこと出来ない。どれだけエッチなことをされているんだ。美しい顔してとんでもない淫乱だ。
「あ、ふうううううううううう」
こらえても引きずり出される。僕はとうとうお兄ちゃんの口の中に射精した。
どぐう、どびゅぐぐぐ、びゅるるるる、びゅううう。
大量に噴き出す。たくさん出るから射精が長い。強烈な快感が長く何度も僕を襲う。
「うああ、はああ、ああああ、あぐああ」
がくがくふるえる。口を閉じられない。僕はお兄ちゃんの頭を抱えてうずくまりベッドに涎を垂らす。
どぐ、どぐ、びぐ、びぐ。
射精が終わっても快感が引かない。もう精液が出ないのに射精するときの快感が脈動するたび襲ってくる。すごい。オナニーとはまるで違う。こんなに気持ちいい瞬間が、こんなに何度も味わえるんだ。
こんなの知ったらもうオナニーなんか出来ない。毎日絶対お兄

ちゃんにさせる。
　僕は快感に包まれながら、こんないい女と毎日やれることに狂喜していた。
　お兄ちゃんはこくこくとのどをかわいく鳴らして飲み込んでいく。精液をまるで甘いジュースのようにおいしそうに飲んでいく。
　顔が真っ赤で汗と涙に濡れている。艶があり色っぽい。淫靡すぎる。僕は射精したばかりだというのに、ギンと硬くした。
　お兄ちゃんは頭をゆっくり振って、口をすぼめて強く吸う。舌で裏筋を強く押し、一滴残らず絞り出そうとする。
「うあああ、ああああ」
　射精後のお掃除フェラまでこんなに気持ちいいなんて。僕のペニスはすっかり元気を取り戻した。
　お兄ちゃんがちゅるりとペニスを口から出した。最後に唇が離れるとき、亀頭に強く吸いつき鈴口を刺激する。
「これで、いいでしょ」
　お兄ちゃんが欲情したまなざしでじっとりと見つめる。
　もちろんいいわけがない。僕もお兄ちゃんもこれっぽっちで終われるわけがない。僕はお兄ちゃんから離れベッドを下りると、急いで服を脱ぎ捨てた。

初体験は挿入即中出し

　お兄ちゃんがベッドの上で四つん這いになり、お尻を振る。今日までずっと我慢してきたセックスをようやく出来る。童貞を捨てられる。相手は男でお兄ちゃん。でもこれほど美しく官能的な女なんて他にいない。最高の初体験になるだろう。
「あなたにたくさんしゃぶらせて射精して、すごく感じちゃった。もうとろとろなの。すぐに入れていいわよ」
　僕はお兄ちゃんに近づきそのお尻をまじまじと見つめる。パンツを脱いで大きなお尻が丸出しだ。女のようにきれいな丸いお尻。僕はそのたっぷりした肉を両手でわしづかみ左右に広げる。
　薄いピンクの肛門がひくひくすぼまったりゆるんだりする。僕を誘っている。求めている。淫乱な肉穴が、僕のペニスを欲しがっている。
　そこは女みたいに濡れていた。男のお尻は性器だ。男のペニスを入れるのに慣れれば中を保護するために膣と同じように濡れるようになる。
「お、お兄ちゃんの、穴、はあ、いやらしい。ここに、僕のペニス、本当に入るの？」
「全部入っちゃうわよ。私の彼、すごく大きいんだから。あなたのは大丈夫よ。使い込んでいるからかなり激しくしても大丈夫だからね。とろとろに濡れたまだほぐしていないきつきつアヌスに根本まで一気に突っ込んで」
　お兄ちゃんはベッドに顔をつけお尻を突き上げ左右に振る。もう待ちきれないようだ。僕も待ちきれない。
　お兄ちゃんのお尻を片手でなでながら、もう片方の手でペニスを握る。お兄ちゃんの小さな淫穴に亀頭の先端をあてがう。
「い、入れるよ。お兄ちゃんのいやらしい穴に入れちゃうよ」
「入れて。私が筆下ろししてあげる。すぐに出しちゃっていいからね。うんとこらえて最高の射精をして」
「う、うん！」
　もう我慢出来なかった。童貞ならだれでもこんないい女と初体験するのを我慢出来るわけがない。相手が男だなんて関係ない。

ずぶりと差し込む。小さな穴が見る見る広がり大きな亀頭を飲み込んでいく様は圧巻だった。
「す、すごい、本当に入っていく」
「一気に入れて。ぶちこんでえ」
何て淫乱なおねだりだろう。はしたないにもほどがある。美しい顔に似合わずとんでもなくスケベだ。
腰を突き出す。亀頭とカリ首が飲み込まれる。きついのにいくらでも広がりぬるりと入っていく。
「う、うわあ、あああ」
あまりの快感に仰け反る。腰が止まってしまう。気持ちよすぎて射精がこみ上げる。
「止まっちゃ駄目、根本まで押し込んで。こんなところで出しちゃ駄目よ」
「うああ、ああう、でもでもでもでも」
気持ちよすぎて動けない。熱くてすごくやわらかいのにぎゅうぎゅう締め付けてくる。一番敏感なカリ首がこんなに強く締められて、動けないまま射精があふれそうになる。
「もう」
お兄ちゃんがお尻をぐいっと押しつけてくる。僕のペニスがずぶずぶと押し込まれ、根本まで丸飲みされる。
「あっあっうわうわひいいいいい」
僕はあまりにも情けない叫び声を上げる。なんともみっともなくうろたえながら初体験の射精を迎える。
「うううううううううう」
涙が漏れる。気持ちよすぎる。意識が飛びそうだ。脳天に落石が落ちてきたようだ。ぐわんぐわんとめまいがする。目を開けていられない。目を瞑ると余計に快感がはっきりわかり、そのあまりの凄さにおののいた。
びゅぐっびゅぎゅっぎゅぶぶぶじゅびゅびゅびゅ。
とんでもない勢いで激しく射精した。根本までお尻に飲み込まれ、一番奥で精液を噴火する。
「あっあぐっあうんっはうん」
僕は子供が甘えるような情けないうめき声を上げながら射精を繰り返す。

「はあん、んんん、駄目え、あうううううう」
　お兄ちゃんのお尻にしがみつく。背を丸め快感をこらえる。耐えきれない。凄すぎる。きつすぎる。今までの射精を全て合わせたみたいな果てしなく強烈な衝撃。
　これがセックス。男のお尻。膣よりはるかに気持ちいいと言われているのが納得できる。膣を知らないけれど、これがこの世で最高の快感だということがはっきりわかる。
「あ、あふ、あう、うううう」
　お兄ちゃんのお尻がぎゅっぎゅと何度も締めてくる。根本をきつく締め付けられると射精が止められそうなくらいだ。その中で射精すると痛い。でも力を緩め再び精液が勢いよく流れるときの快感は倍増し、天国からさらなる高みへいざなわれる。
　どぐ、どぐ、どぷ、どびゅ。
　永遠に終わらないかと怖くなるほど射精が続く。じらせばじらすほど射精の量は多くなる。でもこれほどまでとは。さんざん限界ぎりぎりまでの寸止めを何度も繰り返し、この世で最高の肉穴で搾り出されたのだ。僕に可能な最大量の射精は今までの何倍もの大量噴火だった。
「う、ふうううううう、うううううううう」
　長く何度も天国を迎える。まだ若いからいいが、歳を取った老人がもしここまで気持ちいい穴でセックスしたら腹上死してもおかしくない。比喩でなく本当に昇天しそうなほどの衝撃が全身を貫き心臓を襲う。
「はあ、はあ、あ、はあ」
　ぜいぜいと息をつきながらお兄ちゃんの背にもたれかかる。ようやく終わった。おそらく二十秒もかかっていない。でも何時間も射精し続けたかと思うほど時間が長く感じられ、何時間も全力で走り続けたみたいに体力を使い果たしていた。
「あああ。すごい。こんなにたくさん私の中に出して。彼氏よりたくさん出てる。こんなの初めて。童貞の初セックスってこんなにたくさん出ちゃうんだあ」
　お兄ちゃんがうっとりと甘えた声を出す。中にたくさん出されてとても気持ちがいいらしい。
「はああ。最高。童貞セックス最高だったわあ。入れただけでこん

なに、あん、まだ中で出てる気がするううう」
「そ、そんなに、気持ちいいの？」
「気持ちいいわよお。中出し最高。男のペニス最高。あなたもこの気持ちよさを知ったらきっとやみつきになるわあ。女の幸せを感じるの。すごく女になった喜びがあるの。私幸せよ。あなたの初めての相手になれて」
「僕も、お兄ちゃんが初めての相手で、すごく幸せだ」
「そう。うれしい」
　お兄ちゃんは身体をひねって僕に唇を突き出す。僕はお兄ちゃんと繋がったままその唇にキスをした。
「少し休みましょう。汗だくね。背中にボタボタ垂れて熱いの。そんなに気持ちよかったんだあ。私のお尻。うふふ。うれしいなあ。彼氏以外の人でもちゃんと気持ちよくしてあげられる。お尻を鍛えていてよかったわあ」
　彼氏に鍛えられた。無理矢理犯され肉奴隷にされて。お兄ちゃんをひどい目に遭わせている彼氏が許せない。でもこんな気持ちいい穴で初体験出来たのだ。その点をうっかり感謝してしまいそうになる。
　お兄ちゃんはそのままベッドにうつ伏せになる。僕はお兄ちゃんに入れたままその上に被さる。そしてゆっくり身体を動かし繋がったまま二人で横になる。
　気持ちよすぎて幸せすぎる。疲れ果て、もう何も考えられない。でも僕のペニスもお兄ちゃんのペニスもまだ硬いままで、さらなる快感を求めていた。このまま終わるわけにはいかない。少し休んだらセックスの続きをしよう。
　頭が茹だりすぎて何も考えられない。お兄ちゃんがさっき気になることを言ったような気がする。何だったっけ。気持ちよさを知ったらやみつきになるとか何とか。何の気持ちよさを言ってたっけ。思い出せない……

原作利用権について

原作利用権は、アイデアを原作として利用することができる権利です。

原作として利用するというのは、このアイデアをもとにしてあなた自身のアイデアで改変し、あなたが用意した絵などの素材で作品を作ることです。

漫画、小説、ゲーム、動画、絵本、演劇、映画などあらゆる作品の原作として使用できます。

アイデア以外の絵などの素材を利用することはできません。

例外として文章はアイデアそのものを述べたものであるため、必要に応じて一部あるいは大部分を使用することが出来ます。そっくりそのまま使うのではなく、あなた自身のアイデアで改変して使用してください。

本作品に収録されているすべてのアイデアは原作利用権付きです。

本作品を購入した人は誰でもそれを原作として、自由に改変した上で自分の作品を作ることができます。

体験版など無料で提供したものには原作利用権は付いていません。

原作として使用する際に一切の連絡、許諾、契約はいりません。

原作として使用する際は、原作者名を記載してください。原作、原案、アイデア提供など呼称は何でもかまいません。
原作：二角レンチ

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

原作、原作者および他のあらゆる人、物、団体等に対して貶める、損害や迷惑を与えるなどの行為を禁止します。

原作として使用することにより生じる一切の問題や損失、賠償等に対し原作者は責任を負いません。すべて自己責任で使用してください。

原作者はその原作を用いて作られた作品に対し、利用規定に反しない限り一切関与しません。作品内容に口を出すこともなければ、その作品から得た利益に対し分け前を要求するようなこともありません。

この原作は公開されたものです。そのため、未発表の作品のみを募集する賞などには使えません。

この原作はすべて自分で考えたオリジナルですが、既存の作品と似ていないという保証はありません。アイデアというのは世界中の誰かが同じことを考えているものであり、完全に誰のアイデアとも似ていないアイデアというのは存在しないためです。

原作の著作権を放棄しているわけではありません。この原作を使用して作った作品の著作権はその作成者にありますが、原作の著作権は原作者にあります。

二角レンチが作成、販売している原作利用権付き作品を購入した方は、同時に二角レンチのブログ「ストックスタックストーリー：原作マガジン出張版」内の全ての作品についても原作利用権を有するものとします。

ストックスタックストーリー：原作マガジン出張版
http://stockstackstory.seesaa.net/

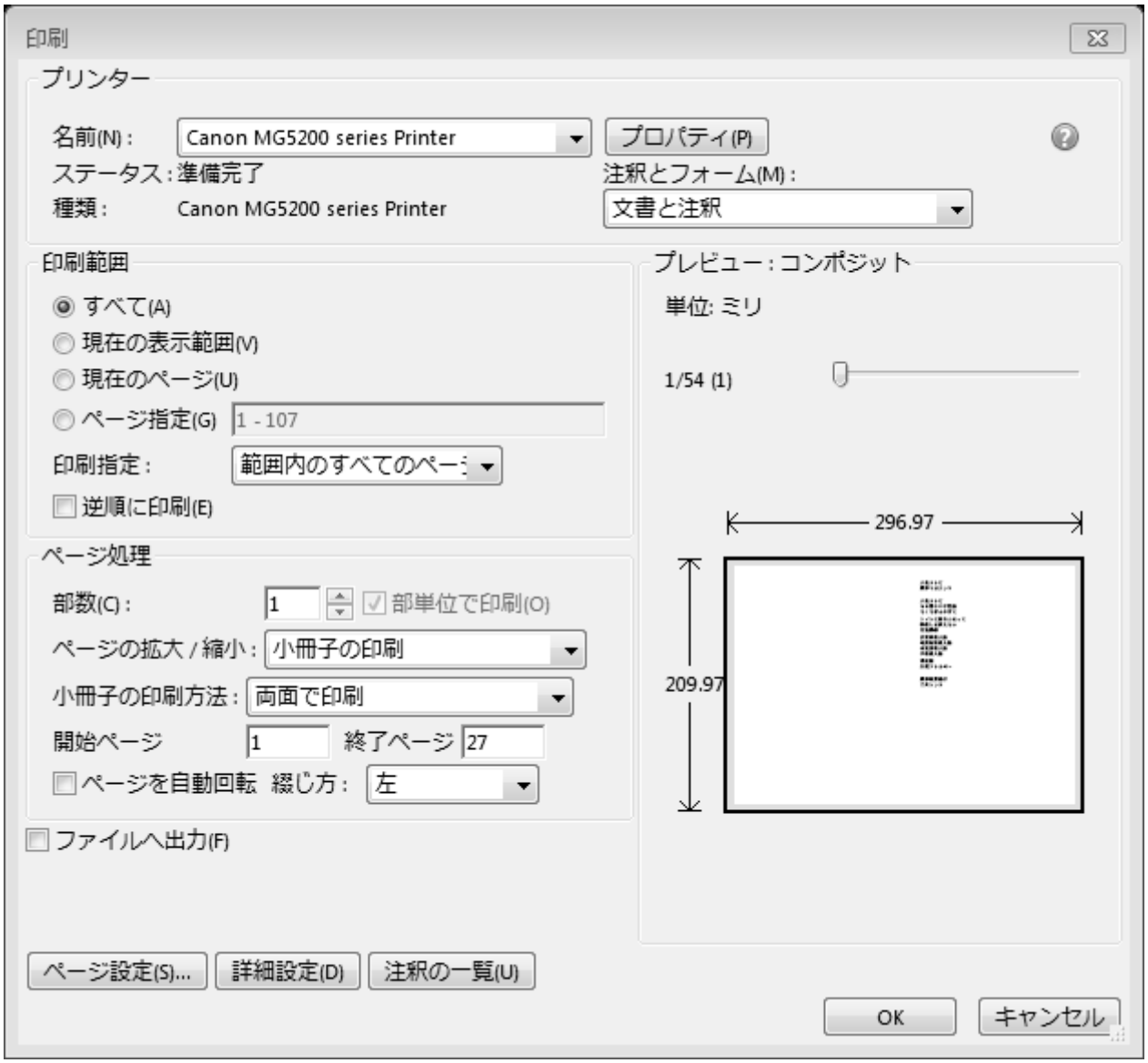
プリンタでの印刷方法

この PDF は印刷して読みやすいようにデザインされています。

１．Ａ４コピー用紙を用います。
２．印刷範囲で「すべて」または「ページ指定」をします。
３．「両面で印刷」「綴じ方：左」で「小冊子の印刷」をします。
４．両面印刷で一枚につき４ページが印刷されます。
５．中綴じ用ホチキスなどで綴じます。
６．二つ折りにすると完成です。

Ａ５サイズで手軽に読みやすい文字サイズになっています。

（注：お手持ちのプリンタがこれらの機能に対応している場合に限ります）



奥付

この内容を無断転載、複製して配布するなどの迷惑行為を禁止します。

この内容を閲覧、利用するなどして生じるあらゆる問題、損害等に関してこちらは一切の責任を持ちません。すべて自己責任で行ってください。

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

作品名
お兄ちゃんの女装を見るとたまらなくなる　体験版

発行日
2012 年 1 月 19 日

著者
二角レンチ

ブログ・連絡先
http://originalmagazine.seesaa.net/